

## 二つの「顔」と「鏡」

——夏目漱石『木屑録』と『倫敦消息』と『倫敦消息』——

### 解 璞

はじめに——比較の可能性について

『木屑録』(一八八九年)と『倫敦消息』(一九〇一年)<sup>①</sup>は、共に漱石文学の出発点だとされ、なかでも、後者は漱石の倫敦留学時代の素顔を知る上でユニークなテキストとされている。

従来の研究では、『木屑録』について、現代語訳や紀行文を考察した研究がある。『倫敦消息』について、写生文との関連、「吾輩は猫である」の「猫」の視点のつながりを検討する論<sup>②</sup>、また『ホトトギス』版と『色鳥』版における改稿に関する整理が見られる。しかし、『木屑録』と『倫敦消息』のつながりについての論考は存在していない。その原因として、『木屑録』と『倫敦消息』の間に十二年間の隔たりがあることが考えられる。また、異なったジャンルに属するのも、その一因であろう。

しかし、一見関係の薄そうな両作品は、いくつかの点で対照的な関係をなしている。一つ目は、両作品の時期である。両作品は子規との交友の最初と最後にあたる。もう一つは、顔と鏡のモ

チーフが共通している。顔と鏡のモチーフは、両作品でしばしば言及され、対となっている。しかも、表現が類似しているながらも、異なるイメージを有しているのである。

本稿は、夏目漱石の『木屑録』と『倫敦消息』における二つの顔と鏡に注目し、両作品における意味と関係を明らかにするものである。具体的には、同時期の日記、ノートや作品を参照しながら、顔と鏡のモチーフについて分析する。それによって、作家以前の漱石をマークする両作品における創作意識が、いかにつながっているのか、それ以後の作品といかに関わるのかを検証していきたい。

#### 一. 『木屑録』——顔の確立と鏡

周知のとおり、『木屑録』は、漱石が子規に送った紀行文である。ただし、その執筆目的は、単なる紀行文ではない。むしろ、子規に「洋文学の隊長」と違ったもう一つの顔を示すためではないか。

たとえば漱石は、冒頭で「遂に文を以て身を立つる意有り。是れ自り遊覧登臨すれば、必ず記有り」と書いている。また、「古人、万卷の書を読み、又た万里の遊を為す」と言い、「窃かに謂えらく、先の記す有らんとして遊ぶこと無き者と、遊ぶこと有りて記す無き者と、相償うに庶幾からんか、と」とも語っている。

「記」と「遊覧」、「書」と「遊」、「記す」と「遊ぶ」という文と旅の対照があるように、文と旅が一体になっているという考え方が見られる。このような考え方自体は、「洋文学の隊長」と異なり、文人的だといえる。つまり、「木屑録」には、「文を以て身を立」てようとした、新たな自己像を作り上げようとする漱石の意識が存在している。

冒頭の執筆目的だけではなく、『木屑録』の本文や執筆前後の漱石と子規の往復書簡にも、漱石が新たな「顔」を確立しようという意志が窺える。それは、書簡にある「郎君」（漱石）、「妾」（子規）という呼び方や、顔についての詩や、それに続く二首の贈答詩などによって反映されている。

その中でも、顔についての詩は、子規とのやりとりによって始めて生まれたもので、『木屑録』で画龍点睛ともいふべき重要な役割を果たしている。ここでは、顔の詩と呼ぶことにしたい。

この詩を書く前に、漱石は、第六節でつぎのように書いている。

余、房に遊びて自り、日び鹹水に浴す。少きも二三次、多きは五六次に至る。（中略）是くの如き者、数日、毛髮漸く緒らみ、面膚漸く黄ばむ。旬日の後、緒らみし者は赤と為り、黄ばみし者は黒と為り、鏡に対して爽然自失せり。

このように、髪は黒から茶色・赤に変化し、顔は白から黄・黒に変化してしまつたため、鏡に向かうとがっかりして驚いたと、漱石は自分自身を戯画化している。それに対し、子規は『木屑録』の眉批で「白素罪無し、鏡に豈に心有らんや」と批評し、本来罪の無い白い顔が日焼けしてかわいそうだが、鏡も下心があつて黄色く映したのではないからと、漱石の諧諷に応えている。

さらに、漱石はこのような顔を詩に詠み、「郎君」「妾」という子規の呼び方をも詠んでいる。これが後に子規との間で話題になつた顔の詩である。

客舎に正岡癩祭の書を得たり。書中、戯れに余を呼びて郎君と曰い、自らは妾と称せり。余、失笑して曰く、癩祭の諧諷、一に何ぞ此に至れる也と。輒ち詩を作り、之に酬いて曰く、

鹹氣射顔々欲黄 醜容対鏡易悲傷

馬齡今日廿三歳 始被佳人呼我郎

詩の前半は、海の塩気で顔が黄色くなつたため、醜い顔が鏡に向かうと悲しくなるだろうと自嘲している。後半は「郎君」と「妾」という子規の呼び方を受け入れ、子規の口ぶりを真似ている。日焼けの「醜容」になつたにもかかわらず、二十三歳の漱石は、「佳人」子規によつてはじめて「郎」と呼ばれたのだと言っている。

つまり、前半は、顔の日焼けした体験を詩的イメージに凝縮させ、後半は、子規との間の呼び方の変化や、それによつて距離を縮めた二人の関係を詠んでいる。こうして、漱石は、自己像と

もに二人の関係をも戯画化している。ここで注目すべきは、漱石の顔は、もはや前の日焼けを体験した顔ではない。子規との間の呼び方の変化とともに、漱石の「顔」も「対鏡易悲傷」という詩的な感性に富んだ「顔」になっている。

この顔の詩をめぐる、漱石と子規はさらに二首の贈答詩を交わした。まず子規は、この詩に次韻し、漱石の詩にある「黄」「傷」「郎」と同じ韻字で、また詩を作った。『木屑録』ではつぎのように記されている。

余、家に帰りて、又た頼祭の書を得たり。余が韵に次して曰く、

羨君房海醉鵝黃

鹹水医痂若藥傷

黄卷青編時読罷

清風明月伴漁郎

漱石に手紙を送った子規はこう詠んでいる。君が房総の海で酒に酔い、傷に薬をつけるように海水で病気を癒し、のんびりしているのが羨ましい。そして、本を読んだら、さわやかな風や澄み渡った月の風景を楽しんでいるのだろう、と。それに対し、漱石はこの詩を批評し、また返答の詩を作った。

余、笑つて曰く、詩は佳なることは則ち佳なり。而れども実に非ざるなり。余、心神衰昏して、黄卷を手にせざること久し。頼祭、固より余の慵懶を識れり。而るに何ぞ此の言を為すや、と。復た詩を作り、自ら慰めて曰く、

脱却塵懷百事閑

儘遊碧水白雲間

仙郷自古無文字

不見青編只見山

漱石は、子規の詩を良い詩と認めながらも、「実」（自分の實際

の状態）を書いたものではないと言っている。実は心神がぼんやりしており、長い間書物を読まずにまなけものになっていると返事している<sup>(8)</sup>。子規がそれを知ったはずなのに、なぜこんな事を詩に書いたのかと少し反発し、また詩を贈った。煩わしい世間から離れ、のんびりと水と雲の間で遊んでいる、この仙郷のようなところに昔から文字がなく、書物を読まずただ山を見ているよと詠っている。このように、漱石の詩では、自己像を子規に示す意識が強くうかがえる。

顔の詩をめぐる漱石と子規のやりとりは、贈答詩にとどまらない。顔の詩の直後にも、漱石はこの詩を読んだ子規の反応を想像し、こう書いている。

昔者、東坡、篔簹竹の詩を作つて、文與可に贈る。曰く、料り得たり清貧の饑太守、渭浜の千畝胸中に在らん、と。与可、其の妻と筍を焼きて晩食せり。函を發きて詩を得、失笑して、噴飯案に満てり。今、頼祭、齡弱冠に過ぎず、未だ室を迎えず。且つ夏日筍を得るの理無きも、然れども詩を得るの日、噴飯案に満つること、與可と同じきこと無からん耶。

漱石は、ここで蘇軾と文同の典故<sup>(9)</sup>を引いている。かつて蘇軾は、「胸中に成竹有り」で知られた與可に「料得清貧饑太守、渭浜千畝在胸中<sup>(10)</sup>」という詩を贈った。詩が届いた時にちょうど與可と妻が筍を食べており、偶然「竹」を「胸中」に納める詩と重なったため、思わず吹き出したという。子規も顔の詩を読んで與可のように吹き出してくれるのではないかと漱石は想像している。ここでは、子規を「文與可」にたとえることによって、漱石自身も「東

坡」になぞらえることができたのである。

漱石の予想した通り、子規は顔の詩に感心し、『木屑録』眉批でも絶賛している。「意は則ち諧謔なるも、詩は則ち唐調にして、吾が兄、此の境を独擅し、吾輩の門戸を窺うを許さず」(意味は諧謔的で、詩の調子は唐詩と同じく、この境地は吾が兄漱石の独壇場であり、吾輩などは到底及ばない)と敬意を示している。

また、子規「筆まか勢」<sup>(11)</sup>にも『木屑録』について言及し、最初に掲げた詩がこの顔の詩である。

鹹氣射顔々欲黃、醜容対鏡易悲傷、

馬齡今日廿三歲、始被佳人呼我郎、

一読して殆んど絶倒す 余京に帰る 漱石余に其著す所の木屑録を示す 是れ即ち駿房漫遊紀行なり

「一読して殆んど絶倒す」とあるように、一読して笑いこころげ子規は、漱石の顔の詩をはじめ『木屑録』を漱石が漢文に長けている証拠として『筆まか勢』に記している。

このように、子規とのやりとりで生まれた顔の詩は、次々と二人の新たな交流を生み、文人としての漱石の才能を子規に認めさせる上で重要な役割を果たしている。また、『七草集』を書いた子規よりも、漢詩文に長けた者として認めてもらいたいという漱石の意識が、顔の詩で示されている。『木屑録』の「顔」とは、子規に劣らないほど「風流」を知る同類としての漱石の自己像だといえる。ここで、漱石は、「鏡」より「顔」のほうに焦点を当てている。

## 二. 「倫敦消息」——ぶれる顔・揺れる鏡

従来、『倫敦消息』に関する見方は主に二つある。一つは、『倫敦消息』は、子規を慰めるために書いた作品としてである<sup>(12)</sup>。もう一つは、文学の定義について悩む漱石を反映した作品としてである。つまり、『倫敦消息』では、子規を喜ばせるユーモラスな一面と倫敦留学時代の漱石の苦い思いは、表裏一体となっているといえる。

しかし、そればかりではない。留学時代の悩みは、文学の定義に限らず、ほかの事物の定義にも及んでいるのではないか。そして、その悩みは漱石の創作にも投影し、積極的な意味で役立てたのではないか。それらの仮説を検証する前に、まず『倫敦消息』を分析していきたい。

『倫敦消息』を書く前の漱石日記(二九〇一年一月五日・土)に既につきのような体験が記されている。

此煤煙中ニ住ム人間ガ何故美クシキヤ解シ難シ思フニ全ク  
氣候ノ為ナラン<sup>(13)</sup>大陽ノ光薄キ為ナラン、往來ニテ向フカラ脊  
ノ低キ妙ナキタナキ奴ガ来タト思ハバ我姿ノ鏡ニウツリシナ  
リ、我々ノ黄ナルハ当地ニ来テ始メテ成程ト合点ズルナリ  
このように、漱石はイギリスに来てはじめてイギリス人との身体的差異に気付いた。さらにこの体験に関して、同年四月二十日(土)の『倫敦消息』<sup>(14)</sup>で以下のように書かれている。

こんな国ではちつと人間の脊に税をかけたら少しは儉約した小さな動物が出来るだらう抔と考へるが夫は所謂負惜し

みの減らず口と云ふ奴で、公平な処が向ふの方がどうしても立派だ何となく自分が肩身の狭い心持ちがする。向ふから人間並外れた低い奴が来た。占たと思つてすれ違つて見ると自分より二寸許り高い。今度は向ふから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思ふと是即ち乃公自身の影が姿見に写つたのである。不得已苦笑ひをすと向ふでも苦笑ひをする。

こうして、一月の体験は四月に文学化されたことがわかる。向こうから「妙な」顔色をした「一寸法師」という漱石の像は、身長や顔色によつて、イギリス人と区別されている。後述するが、「シルクハット」にフロックで出掛けたら」周りの外国人からの評判がよくなることや下女との言語的コミュニケーションが困難であることから、衣装や言語もイギリス人との区別を判断する規準になっている。

しかし、他者にも自分自身にも見える・聞こえる身長や衣装や言語の発音とは異なり、自己を証明する最も重要な標識としての顔だけが、鏡を通さなければ見えないものである。また、広い意味での顔が他者と区別する自己の特徴だとすれば、顔は、鏡としての他者の差異によつてはじめて成立する。そのため、他者に依存度の高いものだといえる。したがって、ここでは顔と鏡の問題に絞つて考えていきたい。

『倫敦消息』において、鏡に映つた影は自分の姿なのだと思つた時に、漱石は、かつて子規と共有した規準と異なつたもう一つの「鏡」——外国人の目に気づかされる。つまり、漱石は、子規という他者から離れ、外国人という新たな他者に出会うこと

で、これまでと違つた自身の「顔」が作られ、見えるようになる。なお、国という分類規準に限らず、「動物」「人間」というように、漱石は「人間」という「動物」の分類規準に目を向けざるを得なくなる。

ところで、一口にイギリス人といっても「我輩」の顔に対し、異なつた様々な反応を示している。そこに漱石の自意識の動揺がうかがえる。

然し時々是我輩に聞えぬ様に我輩の国元を氣にして評する奴がある。此間或る所の店に立つて見て居たら後ろから二人の女が来て *leat poor Chinese* と評して行つた。 *leat poor* とは物匂い形容詞だ。或る公園で男女二人連があれば支那人だいや日本人だと争つて居たのを聞いた事がある。二三日前去る所へ呼ばれて「シルクハット」にフロックで出掛けたら向ふから来た二人の職工みた様な者が *a handsome Jap* といつた。有難いんだか失敬なんだか分らない。先達て或芝居へ行つた。大入で這入れないからガレリーで立見をして居ると傍のものがあすこに居る二人は葡萄酒人だらうと評して居た。——こんな事を話す積りではなかつた。話しの筋が分らなくなつた。一寸一服してから出直さう。(中略) 何こんな生活も只二三年の間だ。国へ帰れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食ふ物を食つて普通の人の寝る処へ寝られる、少しの我慢だ我慢しろくくと独り言をいつて寝て仕舞ふ、寝てしまふ時は善いが寝られないで又考へ出す事がある元来我慢しろと云ふのは現在に安んぜざる訳だ。

「我輩の国元を氣にして評する奴がある」というように、人間の顔を分類する複数の規準では、最も便利にみえるのが「国元」である。しかし、同じ外国人の目に映った「我輩」の顔は、様々にぶれている。異常にぶれる顔が「国へ帰れば普通の人間」に戻れるのは、国には子規のような安定した対他関係があるからである。

さらに、漱石は実際の顔だけでなく、社会的身分や地位を示す言語の分類規準やイギリス人の同一性に対する疑問をも抱いている。たとえば「我輩が尤も敬服し尤も避<sup>15</sup>易する所の朋友」は、下宿の下女ペンという人であった。ペンの言葉が分らない漱石は、彼女を形容して「善人」や「能弁家」という表現を繰り返し使用している。

日本に居る人は英語なら誰の使ふ英語でも大概似たもんだと思つて居るかも知れないが矢張日本と同じ事で国々の方言があり身分の高下があり忤して夫はく千違万別である。然し教育ある上等社会の言語は大抵通ずるから差支ないが此倫敦のコックネーと称する言語に至つては我輩には到底分らない。  
 。（倫敦消息）・二

ペンの方言のように、様々な身分のイギリス人によって、千差万別な英語が使用されている。したがって、言語によつても「我輩」の顔はぶれている。このように、『倫敦消息』では、顔は個人に属するものではなく、国や地域など集団の特徴として浮かび上がる。イギリス人との身体と言語の差異から、日本人という自

己像が逆に規定されることになる。

前述のように、漱石が文学の定義について悩むこと、そして留学後漱石の文学観が変化したことがよく検討されてきた。しかし、そればかりではない。越境することによって、物事を判断する様々な規準も変化している。所謂正常と異常、普通と特殊、礼儀と無礼、常識と非常識など最も基本の分類規準さえ変化している。

こうして、「顔」を映す「鏡」、すなわち安定した規準系がないため、実際の顔が変化しなくても、漱石の自己像は様々にぶれるようになるのである。ただし、同じ国でも言語が様々であり、必ずしも同一性を有するとはいえない。そのため、国という分類方法自体は、果たして合理的なのかという疑問も浮かび上がる。『倫敦消息』では、「顔」よりも「鏡」としての他者、つまり、人間の分類規準そのものに焦点が当てられている。

### 三、複数の「鏡」 複数の規準

前節では、『倫敦消息』における「顔」と「鏡」のモチーフを分析し、文学の定義に限らず、様々な分類規準に対する漱石の考えが、作品でいかに表現されたのかを検討した。一九〇一年一月の日記に書いた顔に関する体験は、同年四月の『倫敦消息』で作品化された。さらに、同年八月の英文学ノートにおいて理論的に思考されるようになった。

なかでも、唯一日付の確認できる留学時のノートでは、漱石は、国を含めた様々な分類規準を確認している。たとえば、「Taste (趣

味)をこのように分類している。

Taste

Taste differs according to individuals

{ by age

by circumstance etc

” ” ” ” to nations

” ” ” ” to time and space

No two individuals are alike in hereditary acquisitions, natural disposition and are placed under the influence of the exactly same artifice. No are two nations. ∴ no universal taste possible

Very few individuals are reflective enough or far-sighted enough to introspect themselves as to the origin and development of their own taste. ∴ no thoroughly consistent taste possible. (if they be reflective and far-sighted enough, consistent parts is almost impossible, because they cannot easily shake off their second nature even if they found something wrong in it.)

このノートに於ける「趣味」は、生まれつきの性質 (hereditary acquisitions, natural disposition) / 年齢や世代 (age) / 地域や職業 (circumstance) / 時空 (time and space) / 国家 (nation) の間の差異によって異なっている。なかでも、国の間の差異は、通常ほかの分類規準を統合するかたちで現れている。それと同時に、ほかの様々な分類規準を隠蔽してしまっている。

漱石はこのノートに記した様々な分類規準をさらに発展させた。帰国後の一連の講義<sup>(19)</sup> (後の『英文学形式論』、『文学論』、『文学評論』) や一九一〇年のエッセイ「鑑賞の統一と独立」でそれについて書き続けている。

たとえば、『英文学形式論』では、ブレエアのアディソンを評する文章に対する自身の態度について、こう述べている。

扱今ブレエアの説を聞いてアディソンの此章句に興味を起したかと問はれると、私自身に於ては成程と感服してしまふことの出来ないのは事実である。然し此批評家の説は間違つて居ると云つて其欠点を指摘することは出来ない。云ひ換へると、私は此文章に付いて、何等の鑑賞<sup>アプレシエシヤ</sup>をも持たないと云ふことになる。

ここで漱石は、外国の批評について「何等の鑑賞<sup>アプレシエシヤ</sup>をも持たない」と自白している。そして、「かう云つた例は世の中に随分多い。人間は賛成しなければ反対すべしと云ふ議論はない筈であるから、私もブレエアの説に賛成もせず、不賛成も称へなくとも不都合はない次第である」と、「趣味」標準の相対性を説いている。

そして、『文学評論』の「第四編 スキフトと厭世文学」でも「趣味」について言及されている。

文学は吾人の趣味<sup>アプレシエシヤ</sup>の表現である。即ちある意味に於て、吾人の好悪を表はすものである。(中略) だから作物にかいてある事は、事実もしくは想像によつて多少変化されたる事実だけれども、外の言葉で云へば、作家が自然から受けた活きた影響を書いたと云つても差支ない。此活きた影響とは、

有機的に吾人の生命の一部を構成するもので、枯死、孤立した断片的知識とは違ふ。即ち未来の行為言動を幾分でも支配する傾向を帯びたものである。是が趣味である。

このように、漱石は、『文学評論』では「文学は吾人の趣味の表現である」と定義している。また、「趣味」は、ある意味で「好悪」をあらわすものだと述べている。人それぞれの受けた「活きた影響」が異なれば、「趣味」が異なってくるし、鑑賞力の結果も当然異なるのだと主張している。

また、『文学評論』「第一編 序言」にも「趣味の普遍性に就て」や「普遍を離るゝ結果」に関する論述がある。「第三編 アゼンン (Joseph Addison. 1672-1719) 及びスチール (Sir Richard Steele 1672-1729) と常識文学」に「常識は解釈の仕様で色々な意味になる」という論点が見られ、「常識」の相対性も主張されている。

さらに、『文学論』でも国民の間の相違に関して、つぎのように述べられている。

次に同一の現象も異なる国民の間には著しき相違を以て現はるゝことあり。而して其原因は前に述べたる組織状態、習慣等の差違に求むべきこと無論なり。かの同一の言語が時に同一のFを代表せざることあるも此種の差違の一例たるのみ。余は之を名けて「解釈の差違」とす。凡そ吾人の周囲を廻転する森羅万象は風の落葉を捲くが如く旋行推移するものにして、其間に變化多く且つ其變化不斷にして常に流動の狀態にあり。而して吾人が筆紙に上すべきは此無数の變化の一現象をとらへ之を脳裏に印するものなれば、甲が一物につき

捕へたる一現象は、乙が同一の現象につき捕へたる点と大に趣を異にするは、尚ほaとoとの母音の間には無限の中間母音介在して、甲乙の二人任意に其中間の音を選む時、此両者が一致すること極めて稀なるに似たり。(中略) 単に古今の差、即ち歴史上同一の開化潮流の配下にありし国民に於てすら如此き多少の變化あるを知らば、東西文化全く其趣を異にする日本、西洋との間に一方ならざる解釈の差違あるべきは無論のことなりとす。更に嚴格の意味に於ては個人の間にも亦同様の差違存在すること自明の理にして、婦人の所謂「立派なる」は男子の所謂「女」は老人の所謂「女」とは大に多かるべく、青年の所謂「女」は老人の所謂「女」とは大に其趣を異にすべし。(中略) 以上を約言すれば、凡そ吾人の意識内容たるFは人により時により、性質に於て數量に於て異なるものにして其原因は遺伝、性格、社会、習慣等に基くと無論なれば、吾人は左の如く断言することを得べし。即ち同一の境遇、歴史、職業に従事するものには同種のFが主宰すること最も普通の現象なりとす。

このように、漱石は、同じ現象に対する「異なる国民の間」の相違から「解釈の差違」とその理由を分析している。それは、大別して「古今」の差と「東西」の差がある。そして、個人の間にも同一現象に対する認識の相違がある。さらに細分化すると、「遺伝、性格、社会、習慣」や「境遇、歴史、職業」などの規準によつて、人々の「意識内容」が異なると述べている。

ここで、注目すべきなのは二点ある。まず一点目は、『文学論』



で記された分類方法は、前述の一九〇一年八月のノートの発想に基づいていることが判明する。そして二点目は、ここで「趣味」や文学鑑賞力に限らず、様々な「意識内容」の規準まで広げて思考されていることである。

「趣味」を含めた「意識内容」の前につねに、だれの意識といふような所有格が存在している。換言すれば、だれの規準をもつて判断すべきなのは、文学鑑賞のみならず、広い意味で認識の前提にもなっている。

#### 四・二つの「顔」と「鏡」

漱石は、自身の「顔」を獲得するためにも、分類規準を決めなければならぬ。ここにこそ、『木屑録』と『倫敦消息』の共通性がある。つまり、両作品とも、「鏡」によって変容する「顔」を描いたといえる。

もう一度『木屑録』に戻つて考えたい。

同遊の士は、余を合わせて五人、風流韻事を解する者無し。或いは酒を被りて大呼し、或いは健啖にして食に待する者を驚かす。浴後には輒ち棋を闘わせて、以て消閑す。余、独り冥思遐捜し、時に或いは呻吟し、甚だ苦しむの状を為す。人皆非笑して以て奇癖と為すも、余は顧みざるなり。邵青門、思いを構うる時に方りて、大苦有る者に類せるも、既に成れば則ち大いに喜び、衣を牽き床を遶りて狂呼す。余の呻吟せる、焉に類する有り。而うして傍の人は識らざるなり。

『木屑録』では、「同遊の士は、余を合わせて五人、風流韻事を

解する者無し」とあるように、「風流韻事を解する」か否かによつて、「同遊の士」が分類されている。換言すれば、『木屑録』では、「風流」人は、人を分類する「鏡」となっている。その結果、「独り」詩文を苦吟する漱石の様子は、異常な「奇癖」として周囲の人々の目に映る。しかし、「何ぞ余に類せることの甚だしき」という子規の眉批にもあるように、漱石は、文人「邵青門」や子規という基準系によつて、つまり子規と「類」を共にすることによつて、安定した「顔」が獲得できたのである。

また、『倫敦消息』にも類似した考え方がみられる。

それから大抵の人間は非常に忙がしい。頭の中が金の事で充滿して居るから日本人杯を冷かして居る暇がないといふ様な訳で我々黄色人——黄色人とは甘くつけたものだ。全く黄色い。日本に居る時は余り白い方ではないが先づ一通りの人間色といふ色に近いと心得て居たが此国では遂に人——間——を去る——三——舎——色と言はざるを得ないと悟つた。——其黄色人がボク——人込の中を歩行いたり芝居や興行物杯を見に行かれるのである。 (『倫敦消息』・二)

「日本に居る時は先づ一通りの人間色といふ色に近い」、そして、「此国では遂に人——間——を去る——三——舎——色と言はざるを得ない」とあるように、「日本に居る時は」、「此国では」との対照が見られる。ここで、「日本」カイギリスかによつて、「顔」が分類され、判断されるのである。つまり、外国人という他者は、顔を映す「鏡」となっている。

このように、両作品における漱石の占める立場の力関係が逆転

している。「木屑録」では、漱石は「風流」人としての一面、つまりこれまでより強い立場を子規に示そうとしている。それに對して、『倫敦消息』では、異国ではじめて外国人としてのより弱い立場に立ったのである。しかし、深刻さの程度こそ異なるが、「顔」があつて「鏡」に向かうのではなく、「鏡」があつてはじめて「顔」が現象できるという点で、両作品が共通している。

##### 五. 漱石における『木屑録』と『倫敦消息』の位置

ここで『木屑録』『倫敦消息』と以後の作品との共通点を検証したい。それによつて、両作品の創作意識は、漱石文学においてどのような位置を占めているのかを探つていきたい。

『倫敦消息』の続編である『自転車日記』<sup>(21)</sup>には、「鏡」(分類規準)に対する関心がうかがえる。同居する「婆さん」について、「瞬きもせず余が黄色な面を打守りて如何なる変化が余の眉目の間に現る、かを検査する役目を務める」と書かれている。そして、「彼二婆さんは余が黄色の深淺を測つて彼等一日のプログラムを定める、余は実に彼等にとつて黄色な活動晴雨計であつた」ともある。「検査」、「深淺を測」る、「活動晴雨計」というように、漱石の黄色い顔は、逆に下宿の婆さんの規準にもなっている。つまり、規準を異にする漱石と下宿の婆さんは、「合わせ鏡」<sup>(22)</sup>のように向かい合っている。ここで、漱石が見つめているのは、もはや「顔」ではなく、「鏡」そのものである。

『五輩は猫である』においても、猫が人間の顔を批評するとき「猫」の規準が垣間見られる。たとえば、「第一毛を以て裝飾

されべき筈の顔がつる／＼して丸で葉缶だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会はずな事がない。加之顔の真中が余りに突起して居る。(一)とある。「毛を以て裝飾されべき筈の顔」「顔の真中が余りに突起して居る」というように、人間の顔を「片輪」と認識するのは、「猫」の「顔」を標準とし、「猫」の目を「鏡」としているからである。

『坊つちゃん』や『三四郎』に至ると、今まで生活してきた空間を離れ、別の空間に移動する主人公があらわれる。東京から地方に移動する「坊つちゃん」の言動は、山嵐にも「妙な顔」<sup>(23)</sup>で見られる。それに対し、地方から東京に移動する三四郎は、「都のまん中」で絶えず「驚き」<sup>(24)</sup>を感じている。彼らは、移動する方向こそ正反対であるものの、共に地方と中心のどちらかを「鏡」とし、それに歪められた自身の「顔」に違和感を持つている。

それに対し、『それから』の代助は、冒頭から既に鏡に向かつており、時間・時代のギャップを直感している。「人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる」(『それから』)とあるように、「旧時代の日本」を乗り越える「御洒落」な顔を撫でる代助は、登場当初から時代や世代の差異を意識している。こうして、『坊つちゃん』や『三四郎』における空間の移動に対して、『それから』の冒頭に、時代の変遷がもたらす「鏡」の歪み(規準の差異)が書き込まれている。

このように、『倫敦消息』以後の作品でも、国家間の差異のみならず、文学ノートにある「age」(年齢や世代)や「circumstance」

(環境)や「natural disposition」(生まれつきの性質)——大別して「time and space」(時間と空間)——の差異による歪んだ鏡は、ひき続き重要な役割を果たしている。

## 六. おわりに

『木屑録』において、漱石は「風流」人としての自己像を子規に認めてもらった。ここでは、「顔」と「鏡」がずれない場合、「鏡」よりも、様々な「顔」に焦点が当てられている。それに対し、「倫敦消息」において、漱石は新しい他者としての外国人に出会うことで、安定した規準を失った。そのため、「顔」が様々なぶれることになる。ここでは、「顔」と「鏡」がずれる場合、「顔」よりも、様々な「鏡」に焦点が当てられている。

つまり、『倫敦消息』では、「国元」が「顔」を分類する「鏡」となっている。『木屑録』では、「風流」人の規準が「顔」を分類する「鏡」となっている。このように、両作品は、十二年間隔たっているものの、根底にある顔と鏡のモチーフが、連続しており、深化されているのである。

また、何を「鏡」にするのか、何をもちて「顔」の分類規準にするのかについて、漱石は以後の作品においても問いつづけているのである。この意味でも、漱石文学における「顔」と「鏡」を考へる際に、『木屑録』と『倫敦消息』の関係を抜きにして論ずることは不可能であろう。

注(一) 『木屑録』は一八八九(明治二十二年)九月九日に執筆されてお

り、『倫敦消息』は一九〇一(明治三十四)年四月(一)は四月九日、「二」は四月二十日、「三」は四月二十六日に執筆された。『木屑録』の漱石直筆稿本の影印本は、一九三三年に岩波書店によって出版されている。なお、本稿では、比喩的に用いられた「顔」や「鏡」を括弧で示している。

(2) 小宮豊隆解説・湯浅廉孫訳文『木屑録』(岩波書店 一九三三年十二月)や、高島俊男『漱石の夏やすみ』(ちくま文庫 二〇〇七年六月)による現代語訳がある。また、熊坂敦子「子規との邂逅——『木屑録』『筆まかせ』をめぐる」(『国文学』一九七八年五月)や、樂殿武「漱石『木屑録』の旅——風景の成立」(『国際文化研究』二〇〇三年十月)などがある。

(3) 長島裕子『ほと、ぎす』の日記募集と漱石の『倫敦消息』(『近代文学・研究と資料』第六集 一九七八年六月、石崎等)初期の文章——『倫敦消息』の位置をめぐる(『竹盛天雄編『夏目漱石必携Ⅱ』一九八二年五月)などがある。

(4) 『倫敦消息』の『ホトトギス』版は、「ホトトギス」(第四巻第八号・第九号)一九〇一年五月三十一日・六月三十日に掲載された。「色鳥」版(大幅改稿・一)を削除は、一九二五年九月十二日に新潮社によって刊行された。

(5) 岡田英雄「作家の添削——漱石の『倫敦消息』について」(『言語生活』一六三三号 一九六五年四月、久泉伸世「ふたつの『倫敦消息』と『自救的動産差し押さえ』と」(『専修人文論集』一四九号 一九九二年二月)などがある。

(6) 眉批は、本文上部に書き込む批評を指す。  
(7) 欄外は、子規の雅号。欄を並べるように典拠を多く使用するという比喩で用いられている。唐李商隱の雅号「獮祭魚」に因んだものである。

(8) 一八八九年九月十五日(日)正岡子規宛書簡にも「小生も今度は黄卷青編時説罷どころではなくふらくと暮し過し申し候」とある。

- (9) 文人画家文與可は、親友蘇軾が書いた『文與可画筍簞谷偃竹記』にある「胸有成竹（胸中に成竹有り）」の話でも有名である。なお、一八九七年漱石の俳句に「文与可や筍を食ひ竹を画く」という句があり、『草枕』（六）にも「文与可の竹である」とある。また、一八九一年四月二十日（月）正岡子規宛書簡に「君が芳墨を得て始めは其唐突に驚ろき夫から腹を抱へて満案の咄を噴き終りに手紙を掩ふて泣然たり」とある。
- (10) 「文与可どのは」竹の産地の太守となつたあかつきには、千戸の諸侯の富にもひとしい渭水のほとりの広い竹林と豊富なたけのこを、すべて腹に収めてしまふことでしょう」という（『漱石全集』第十八巻）。
- (11) 正岡子規「筆まか勢 第一篇 明治二十二年 ○木屑録」（『子規全集』第十巻 講談社 一九七五年五月）。
- (12) 相原和邦「作家の誕生」（『国文学 解釈と鑑賞』一九七九年六月）では「倫敦消息」と『吾輩は猫である』の関係、前掲の高島俊男『漱石の夏やすみ』では『木屑録』と『吾輩は猫である』の関係が指摘されている。
- (13) 『文学論』序（一九〇六年十一月）（『漱石全集』第十四巻所収）にはそれに関する記述が見られ、「文学の如何なるものなるか」について悩む漱石がよく知られている。
- (14) ここでは、作家以前の漱石を取り扱いたい。そのため、子規・虚子宛書簡にあたる『ホトトギス』版を使用している。
- (15) 『文学論』序にも「余は物教奇なる酔興にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志よりもより大なる意志に支配せられて」とある。「より大なる意志」はこの国・地域の共同体の意味に近いと考えられる。
- (16) 広い意味での異文化は「国」に限らず、後述の『文学論』に「職業」の違いも挙げられている。階級や職業など「国」だけでは括りきれない、様々な規準が存在していることが強調されている。
- (17) 『漱石全集』（第二十一巻）に「ノートⅣ—13 Taste Words
- (18) 漱石の文学ノートには「ノートⅣ—14 Taste & Works of Art (note Aug. 1901)」と表記されている。
- (19) 『英文学形式論』（原題『英文学概説』一九〇三年四月—六月）、『文学論』（一九〇三年九月—一九〇五年五月）、『文学評論』（原題『十八世紀英文学』一九〇五年九月—一九〇七年三月）の三つの講義は三部作をなしている。
- (20) 「鑑賞の統一と独立」（『芸圃』『東京朝日新聞』一九一〇年七月二十一日）にも、「往年余が英国に留学して、文学といふ茫漠たるものを研究してゐる際に、作物の評価上、大に彼此の差に迷つて困却した事がある。（中略）仕舞に自家の味はふべきものに、他人の味覚を標準とするは顛倒である、文芸の鑑賞は善かれ悪かれ自分の持つてゐる舌でやるべき仕事である、いくら信用して然るべき男があるにしても、此道ばかりは代理を頼む訳に行かないものと悟つた」とある。文学に対する「彼此の差」に「困却」した漱石は、作品の「味」を「他人の味覚」ではなく、「自分の持つてゐる舌」を「標準」とすべきだと語っている。なお、福井慎二「漱石『文学論』への私註——〈趣味〉の分類学」（『国文論叢』一九九四年三月）にも「趣味」についての考察がある。
- (21) 『ホトトギス』第六巻第十号 一九〇三（明治三十六）年六月二十日。
- (22) たしかに、ここで下宿の婆さんや「倫敦消息」の下女ペンは、個人の視線から漱石を見ているという反論があるかもしれない。しか

し、彼らは、本来、日本では個人であるはずの漱石を、個人としてというよりも、おそらく黄色人のなかの一人として見ていることが、漱石の記述に窺える。つまり、その視線には、たとえ無意識であつても、国や人種的な差異を見る、より大きな視線が潜在しているといえる。その差異を見る婆さんの目を意識する漱石は、逆に婆さんに影響を与えている。つまり、ここで立場が逆転できる「合わせ鏡」となっているのである。

(23) 「江戸っ子」と自負しつつも、「坊つちやん」の中にアイデンティティの揺らぎがあることがしばしば指摘されている。たとえば「生徒たちに対してもそうだし、松山の人々に対しても、東京者として、ないしは江戸っ子としてのステータスで語る。しかし、東京者が江戸っ子かというのは実は決定的に価値体系としては違って、本人も分からなくなるから、追いつめられると、清のことを思い出してそこへ逃げ込む。」と小森陽一は指摘している。(鼎談「明治の『坊つちやん』」『漱石研究』第十二号 一九九九年十月)。

(24) 「おれは江戸っ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるが、と答へてやつた。(中略) うん丈では気が済まなかつたから、此学校の生徒は分らずやだなど云つてやつた。山嵐は妙な顔をして居た」「飯を済ましてからにしやうと思つて居たが、癪に障つたから、途中で五円札を一枚出して、あとでは是を帳場

へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をして居た。」「坊つちやん・二」というように「妙な顔」「変な顔」で見られる箇所がある。

(25) 「三四郎が東京で驚ろいたものは沢山ある。(中略) 尤も驚ろいたのは、何処迄行つても東京が無くならないと云ふ事であつた。」「三四郎・二の二」とあり、「驚ろき」という表現は十回も出ている。

(26) 佐藤裕子「漱石解読——(語り)の構造」(和泉書院 二〇〇〇年五月)では一人称の視点から移動した人物に言及している。

(27) 紙面の関係で『自転車日記』から『それから』までの例を挙げ、空間や時間による他者との規準の差異を検証した。実際、他者との差異に限らない。『文学論』(古今の差)にも述べたように、同じ人のなかにも「今」と「昔」の規準の差異がある。たとえば『坑夫』の「無性格論」や『明暗』の津田を悩ます「謎」にもつながっており、さらなる検討が必要となり、今後の課題としたい。

\*本稿の引用は、岩波版『漱石全集』第二次刊行(二〇〇三年)に拠る。傍線や傍点および漱石漢詩の現代語訳は、引用者に拠るものである。尚、旧字は適宜新字に改め、ルビも一部を除いて省略した。

\*本稿は二〇一〇年度早稲田大学国文学会秋季大会(十一月二十六日)における研究発表に基づいております。ご意見を頂きました方々に、心よりお礼を申し上げます。